

藝大通信

15

SEPTEMBER
2007

TOKYO
GEIDAI
東京藝大広報誌

特集 東京藝術大学創立120周年

【特別対談】

宮田亮平 東京藝術大学学長 成田豊 (株)電通最高顧問

藝大120年の現在形・未来形

松井冬子 伊藤有壱 高木綾子 野村萬斎

東京藝術大学創立120周年記念事業

教員は語る 第七回 筒井ともみ×福島明也

藝大の歩き方 第七回 正木記念館



平櫛田中作「岡倉天心像」

岡倉天心（おかくら・てんしん）

1863（文久2）年横浜生まれ。美術家、美術史家、美術評論家、美術教育者。本名は覚三（かくぞう）。幼名は角蔵。東京美術学校（現・東京藝術大学）の設立に大きく貢献し第2代校長となる。日本美術院の創設者としても知られ『茶の本』『東洋の理想』など数多くの著作を残した。1913年（大正2）年没。
写真の「天心像」は東京藝術大学美術学部構内にある。

3....17 特集

第15号目次

東京藝術大学創立120周年

[特別対談]

歴史と伝統を生かして取り組む社会貢献

宮田亮平（東京藝術大学学長） 成田豊（株式会社電通最高顧問 電通グループ会長）

藝大120年の現在形・未来形

松井冬子 伊藤有壺 高木綾子 野村萬斎

創立120周年事業の概要 池田政治

「岡倉天心—芸術教育の歩み—」展 古田亮

創立120周年記念音楽祭 松下功

120周年記念企画トピックス

東京藝術大学120年年表

18....19 藝大の歩き方

上野の杜のキャンパスガイド

第7回 正木記念館 横溝廣子

20....21 クラブ・サークル訪問

第6回 茶道部 高場泉穂

22....25 教員は語る 第7回

藝大への期待・抱負・提言

筒井ともみ×福島明也

26....27 NEWS2007.3～2007.8

編集後記

東京藝術大学広報誌
藝大通信 第15号

編集発行
東京藝術大学藝大通信編集部

編集委員
長濱雅彦（美術学部デザイン科准教授・編集長）
飯野一朗（美術学部工芸科教授）
植田克己（音楽学部器楽科教授）
毛利嘉孝（音楽学部音楽環境創造科准教授）

アートディレクター
蓮見智幸（美術学部デザイン科教授）

制作
株式会社 平凡社

発行日
平成19年9月10日

お問い合わせ先
東京藝術大学総務課参事役付企画評価・広報室
〒110-8714 東京都台東区上野公園12-8
電話 050-5525-2027
FAX 050-5525-2479
e-mail toiwase@ml.geidai.ac.jp
URL http://www.geidai.ac.jp



特集

東京藝術大学 創立120周年

東京藝術大学は今年創立120周年を迎えた。

1887（明治20）年10月、岡倉天心と伊沢修二の尽力により、東京美術学校、東京音楽学校が開校して以来日本における芸術教育の中心として美術界、音楽界に優秀な人材を送り続けてきたのである。

特別対談、記念事業紹介などをおして

豊かな歴史と伝統を踏まえつつ藝大の未来を見据える。



歴史と伝統を生かして 取り組む社会貢献

(参加者)

宮田亮平

東京藝術大学学長

成田豊

株式会社電通 最高顧問



宮田亮平 (みやた・りょうへい)

東京藝術大学学長

一九四五年新潟県佐渡生まれ。

一九七二年東京藝術大学大学院修士課程 鍛金 修了。

一九九〇年文部省在外研究員として工芸美術館 (ハンブルク) 派遣。

一九九一年から東京藝術大学美術学部教授。美術学部長を経て、二〇〇四年から理事及び副学長。二〇〇五年から現職。

イルカをモチーフとした「シブリンゲン」シリーズなどの鍛金作品をこく、日本現代工芸美術展大賞・文部大臣賞・内閣総理大臣賞、読売新聞社賞などを受賞。



藝大の歴史と社会連携

司会 この度の東京藝術大学創立一二〇周年記念対談には、株式会社電通で最高顧問、電通グループ会長をなさっている成田豊様をお招きしました。

本日はお二人の対談をとおして、藝大の社会連携の取り組みや、地域とのコミュニケーションのあり方について、一二〇年の歴史を顧みるとともに、新たな時代の社会からの要望と藝大の展望を語り合っていたいただき、今後の藝大が進むべき道を探っていただきたいと思います。初めに、藝大の歴史と社会連携について宮田学長からお願いします。

宮田 東京藝術大学は今年創立一二〇周年を

むかえます。

明治政府が西欧列強に伍していくためには、産業と同時に芸術教育が重要であるとして、一八七九 (明治十二) 年、本郷に音楽取調掛、一八八五 (明治十八) 年、小石川に図画取調掛を設置し本学の前身ができたのです。一八八七 (明治二十) 年にそれぞれ東京音楽学校、東京美術学校と改称されてから一二〇年間、本学は芸術の専門教育および研究機関として、数多くの卒業生、研究者を通じて我が国の芸術界で大きな役割を果たしてきました。

東京音楽学校初代校長であった伊沢修二は、日本人はそれぞれの地域の民謡しか知らないけれど、子供たちが楽しく一緒に歌える童謡唱歌が欲しいと考え、多くの若者に西洋音楽を学ばせたのです。その教えを受けた滝廉太郎が「荒城の月」を作曲しました。一方、美術では法律の勉強のためヨーロッパに赴いた黒田清輝が、パリで絵画のすばらしさに惹かれ洋画家となって帰国し、東京美術学校の基礎を築いた岡倉天心のもと西洋画科の発足に際して教員となり、西洋画教育の実践にあたりました。

こうした例を振り返ってみても、日本人は、世界中のものを受け入れて、それを醸造したうえで発信していくことに長けた民族だということがよく分かります。このように物事を受容し、それを伝えていく感性やテクニクという点において、私ども東京藝術大学と、長年にわたって日本の広告界をリードしてきた電通とは一致する部分があるのではないかとつねづね思っています。

成田 全くそのとおりだと思います。私どもの会社の歴史は、一九〇一 (明治三十四) 年に始まりますが、宮田学長が言われたように、

明治の日本の人たちは素晴らしかったと思います。鎖国から開国し、法律や経済という国家の仕組みや制度を整えなければいけないという状況で、美術、音楽といった芸術にも目を向け、また伝統を守らなくてはいけないということに深く思いを致していたのです。それが明治・大正・昭和と続く中ですぐれた情操教育として根づいてきたのでしょうか。

いま世界的規模で市場経済が高度に発達する中で、企業が社会的責任を持ち、世の中にリターンをしていくということが課題となっています。そういう状況だからこそ、私どもは東京藝大が日本の歴史の中でどういう働きをしてきたのかということに大きな関心を抱いております。

宮田 まさしくいま最も大きい藝大の役割というのは、社会との連携にあると思います。芸術家というのは、何か難しく、一般の人には理解できないことをやっていると思われるかもしれませんが、それは大きな誤解なんです。「芸術は身近なものである」という哲学を私は持っております。喜びや美しさを感じない人はいませんか、それをわかりやすく伝える人が生業にしているだけで、全ての人々が芸術家であるという意識を私は持っています。

だれでも小さい頃は、お絵描きや歌が好きでしたね。全身全霊で、歌い、描いていたはずなんです。それが小学校や中学校にあがると、堅い扉で閉じてしまう。そこには、人と人との比べ、評価を数値で表わすという教育の問題があると思うのです。本来は素敵なこと、心から好きであったはずのものに改めて気づき、確認させるといったことも私たちの重要な仕事だと思っています。



成田豊（なりた・ゆたか）

株式会社電通 最高顧問 電通グループ会長
一九九九年現在のソウル市生まれ。
一九五三年東京大学法学部卒業。同年電通入社。営業局（現在の新聞局）地方部に配属。一九七一年新聞雑誌局長、一九七七年第七連絡（現営業）局長、一九八一年取締役・東京本社連絡総務、一九八三年常務取締役、一九八九年専務取締役を歴任し、一九九三年に代表取締役社長に就任。
二〇〇二年には代表取締役会長となり、二〇〇四年に現職である最高顧問、電通グループ会長に就任。
二〇〇五年より社団法人日本広告業協会会長を務める。

ソニーの元会長である大賀典雄さんが、藝大に経済学部をつくりなさいと言われたことがあります。それを聞いていた人は大変驚いたのですが、私はなんて刺激的で面白い話だと思いました。芸術にもお金がかかるわけですが、社会に貢献する一種の経済活動でもあるという点で、結果的に同じところへ行きつくという思いがしたのです。

成田 大賀さんも藝大の卒業生ですよ。私も親しくさせていただいております。

私は上野という地は、東京の玄関であり、また近代史における文化の中心だと思っています。実際に現在も、藝大があり、そしていろいろな美術館や博物館など、知のセンターがあります。上野には広大な公園スペースがありますが、そこに藝大の教員や学生がつくった作品を置けばいいなとずっと考えていたのです。

宮田 昨年、上野の国立科学博物館で「上野公園を語ろう、緑を語ろう」というシンポジウムがありまして、私はそのとき、緑というのはコントロールすることによって初めて美しさが出てくるのだ、ということをつたえたのです。そこで、上野公園に癒しの空間をつくるのであればぜひ藝大も参加したいと提案しましたところ、旧奏楽堂の前に緑地公園をつくろうという話になり、学生の卒業制作作品を置くことができました。私の次の夢は、東京国立博物館から西郷隆盛像までのスペースにも芸術作品を並べるということです。

成田 大賛成ですね。最近、防衛庁の跡地に東京ミッドタウンができましたが、公園があつて緑が本場に多いのです。ここで散歩をしよう、ベンチに座り、青い空を見上げれば、実に心が癒されると感じました。藝大がいま

上野（恩賜）公園の有効活用を考えておられると聞いて非常にうれしく思いました。芸術の力で上野のたたずまいに美しさと落ち着きを与え、人々を魅了することだと思います。そういった事業を提案し、また知恵を出すということでしたら、我々も是非、お手伝いさせていただきます。上野周辺を活性化し美しく蘇らせるというのは、現在の藝大の大きな務めではないでしょうか。

宮田 実現すると大変な波及効果が出てくるでしょう。例えば学生がつくった作品が一般の人々の評価対象になるわけです。いい作品だったら立ち止まるし、そうでないと通り過ぎてしまふ。みんながほっとしてくれて、待ち合わせをしようという場所になるといいですね。

成田 上野にはかつて「学術都市」としての地位がありました。上野の杜を、市民の文化・芸術・科学の交流の場、「カルチャー・フオレスト」といったビジョンで見直したらどうでしょうか。お聞きした藝大の試みは、地方から来た人や、外国からお見えになった方々に、上野の芸術性を再認識していただくことができると思います。

宮田 こういうプロジェクトを実現していくには教育の力だけでは弱いので、電通との出会いが大きな発展に繋がっていくと思うのです。

常識と非常識、 当たり前と非当たり前

成田 広告が社会の中でその役割を認められるのに大変尽力したのが、電通四代社長の吉田秀雄です。戦後いち早く米国のパブリッ

ク・リレーションズ（PR）という思想・手法を日本に紹介し、企業や自治体などの公的機関が大衆と良好な関係を保つことの重要性を指摘しました。自らも、一九五一（昭和二十六）年、電通の創立五〇周年として、日本における広告功労者の顕彰事業を企画し、その象徴として千代田区の三宅坂、最高裁判所の前に「平和の群像」を建造し東京都に寄贈したのです。この場所には以前、軍人の乗馬姿の像があつたのですが、平和産業を担うものとして広告を位置づけ、その象徴としてこれを建てたのでした。「愛情」「理知」「意欲」を表す「平和の群像」は奇しくも藝大の菊池一雄名誉教授の作品であり、電通と藝大との浅からぬ縁を感じております。

広告の地位向上には経済の発展が必要だけれど、実際は提供する中身の問題、人間の課題なのではないか。広告の働きとして、いいクリエイティブとコンテンツをつくるには、芸術と科学の融合が必要であると吉田は考えたのです。要するに広告というのはひとつの投資であり、科学的な裏づけをもとに投資とリターンを考えなければいけない。そういう芸術と科学の最先端を結びつけることが、我々広告会社の、ひいては日本の目標である、と繰り返し語っていました。ですから、私ども広告会社にとって、藝大とさまざまな形で連携できることはものすごい誇りでした。

宮田 最高の賞賛をありがとうございます。

「常識と非常識」「当たり前と非当たり前」という話があります。藝大での常識が社会では非常識であつたり、広告代理店では常識なのだけれど、大学では「えっ」と驚くものがあるわけです。ところが、その「えっ」が大事だと思うのです。「非」というのは、なにも

異なることではなくて、「似て非なる」ものが融合することによって、新しい時代に対しての提言や課題を与えることになると思います。

これまで私どもは、難関な受験に合格した学生にしか教えてこなかったのですが、もう時代は変わりました。あえて言うならば、「我が社は」という言い方になりますが、我が社の仕事は、社会に喜びを伝えることであり、そのために学生や教員が努力し、研鑽し、どのようにすれば喜びを伝えられるかを考えることが大切だと思うのです。

同時に、電通を含む広告業界と、伝え合うという点で意識を共有し連携するためには、お互いに大きなコンテンツの輪の中に入ることとで、初めて現実的な力になっていくと思うのです。力は文化をつくり、文化は芸術をつくる。そして歴史をつくることになるのです。それが今日改めて確認できる場面になったのではないかなと思います。

成田 芸術と経済ということですが、たとえば急速な経済発展の途上にある中国に私どもは早くから関心を持っておりました。一九九六（平成八）年の創立九五周年記念事業として「日中広告教育交流プロジェクト」を開始しました。北京大学、人民大学、清華大学、北京广播学院、上海大学、復旦大学の六大学に、最新の広告理論やクリエイティブを学ぶ広告の講座を提供したのです。

ちょうど鄧小平氏の指導のもと、社会主義市場経済が始まった時期でした。中国の当時の広告は表現レベルでも見劣りし、誇大広告なども多かったのです。中国の親しい友人（経済官僚）から、どうにかならないかという依頼を受け、「広告講座」を考えたわけです。中国の広告はまだ遅れていて、ちょうど日本

の戦後間もない時期と同じ状態だったのです。嘘や偽りのないコミュニケーションの重要性、優れたクリエイティブの意味を理解して欲しいと思いました。講座の講師は、我が社の部長クラスが主とめ、中国の古典「礼記」にある「教学は相長ず」教えることは学ぶこと、学ぶことは教えること」の精神で、実学重視の講義を行い、大いに成果をあげることができました。このように、たとえば藝大と中国の大学が交流し、共同研究したら、いい意味での相互関係が生まれてくるのではないかと思います。

宮田 今のお話をお聞きしていて、私はある人の言葉を思い出しました。ハーバート・リード^{*}が、世の中に優れた芸術作品を置くことによって、社会のモラルが向上すると言っているのです。いい広告があり、いい芸術があることによって、人間のモラルそのものまでもレベルが高くなるとリードは言うのです。

成田 それを伝えていくことが大事であり、発展のはずみになりますね。そこからブランドがまたひとつ生まれるわけです。

宮田 ブランドとはいいい言葉ですね。

成田 いま、日本人にはブランドが必要だと考えます。私はNPO法人「富士山を世界遺産にする国民会議」の理事長を務めており、日本人の心のふるさとでもある富士山が世界遺産になることにより、もう一度、日本人に誇りを取り戻したいと思っています。

宮田 偶然ではありますが、富士山といえば実はこういうことがありました。「アジア・ゲートウェイ戦略会議」の報告書の表紙に富士山を描いたんです。安倍総理の諮問委員会が作成した書類の表紙をみたのですが、そこには文字しか書いてなかったんです。それはな

いだろうといいつて瞬間的に描いたところ、ちょうど頂点で筆先がパキッと割れたんです。実は波を描こうか、イルカを描こうかなどと考えたのですが、それが富士山になったのです。日本を軸としてアジアでスクラムを組み、EUやアメリカに対抗していこうというときに、リーダーシップを担う日本の象徴が描かれたことに皆が共感してくれたのです。こうした富士山の「美」を思う日本人の「心」が成田さんが理事長を務め進めている富士山世界遺産構想と一体化したら、これは素晴らしいことですね。

「鬼十則」と『美』の思想

宮田 藝大から二三〇人を超える卒業生が電通で逆に学ばせていただいているということに対して敬意を表すと同時に感謝申し上げます。その中のひとりに、有元利夫氏^{*}がいました。彼の作品ももちろん素晴らしいのですが、大変いいのは、「藝大で創ることを学び、電通で伝えることを学んだ」という彼を体現する言葉です。すばらしい言葉だと思いますね。

成田 これは本当にすごい言葉ですね。彼は不幸にも夭折してしまうのですが、私も全くそのとおりだと思います。先ほどもお話ししたように、実際我々は、伝えることをいろいろと研究しているわけです。

宮田 そのためには国境をつくらないこと、共通言語をつくるのが重要なことです。これがまさしく芸術にとつて大事なことでないでしょうか。私は、いま変な造語をつくっているんです。古いものを大切にし、そこから新しいものを発想するということで、「オールド」と「ニュー」を合わせた「ニューオール

*1 ハーバート・リード
イギリス生まれの詩人、美術評論家、文学批評家（一八九三年―一九六八年）。青年時代は詩人であったが、第一次世界大戦帰還後、ビクトリア・アンド・アルバート美術館に勤務中、所蔵品の解説がきっかけとなり、美術評論家となる。日本では美学を論じた著作が主に邦訳されていることから、詩人よりは美術評論家としての肩書きが有名。
『文学批評論』『自伝』がある。



*2 アジア・ゲートウェイ戦略会議
アジア・ゲートウェイ戦略会議とは、人・モノ・サービス・資金・文化・情報の流れにおいて、日本が世界とアジアの架け橋となり中核を担い存在感を高めるとともに、アジアの成長と活力を日本に取り込み、新たな「創造と成長」を実現すること。アジアの発展と地域秩序に責任ある役割を果たすこと。魅力があり、信頼され、尊敬される「美しい国」を目指すこと。以上を目的とした構想の実現に向け、必要なる政策を議論する場として設置された戦略会議。



有元利夫「私にとってのピエロ・デラ・フランクスカ」10点連作のうち1点

*3 有元利夫
一九四六年岡山県生まれ。一九六九年東京藝術大学美術学部デザイン科に入学。在学中、イタリアのフレスコ画に感銘を受け、日本の仏画との共通点を見出し岩絵具を用いるようになる。卒業後、デザイナーとして電通に勤めるが、一九七六年より画業に専念。一九七八年「花降る日」で安井賞特別賞を受賞。一九八一年には「室内楽」にて第24回安井賞を受賞する。一九八五年逝去。

ド」という言葉なんです。

成田 すばらしいコピーライターですね。

宮田 いや、とんでもないです。要するにお題目が何かないと物事が伝えられないのです。文化、芸術、それに宗教というのは、待っていてもだれも来てくれないんです。自分たちから出掛けて行ってお題目を唱えることによって、現実から非現実へ行くことができます。待っていたらだめなんです。私たちのほうから出向いていくこと、日常から我々にとつて非日常の世界へ行くことによって、享受する人とともに充実感を味わうことができる。それをやることも芸術家の仕事、ないしは広告の仕事ではないでしょうか。

成田 おっしゃるとおりだと思います。私は、やはりやる気がなければだめだと思うのです。そして大切なのは、どのようにやる気を持てるかということだと思います。そういった問題に対して、電通には「鬼十則^{*}」という強烈な社訓があるのです。四代社長吉田秀雄がこれを書いたのは、一九五一（昭和二十六）年です。その当時すでにアメリカは高度な資本主義に入っていましたから、広告の役割はかなり大きかったわけです。そこで吉田は日本も、新聞や放送と一緒に広告を発展させ、アメリカ並みの大衆消費社会に到達するためには、どういったことが一番効果的であるかという広告の近代化を真剣に考えたわけです。鬼十則には、多くの仕事に共通する創意工夫、自発性、リーダーシップなどの重要性が力説されています。

宮田 「鬼十則」に書かれているなかですごくいいのは、最初は「させられている」という受動的な意識があるのですが、能動的に自

分がやろうという気持ちになるという言葉なんです。自己啓発がないと世の中はうまくいきません。

私が学長になって最初の入学式に、実はこんな言葉を書かせていただきました。羊が大きいと書いて、「美しい」という字になるんです。「美しい」に「身^み」で、「躰^{たがひ}」になります。「躰」というのは、「させられている」という意識があるのですが、「鬼十則」と同様、本来そうではないのです。藝大に入ること認められたあなたたちが、自分が美しいと思うことを、能動的に自己発生させることにより、いい状態で社会に出ることができるとい話をしました。

いままさしく吉田秀雄さんのお話を聞いてつながりを感じ取りました。

産学官の連携と意識の共有

宮田 平山郁夫前学長の時代、二〇〇五（平成十七）年十二月に東京藝術大学と電通との間で産学連携に関する協定書を締結しまして、本学の横浜校地大学院映像研究科において、寄附講座^{*}を開講させていただいておりますが、これが大変大きな波及効果をもたらしております。これを国としてもバックアップしたいというお話も聞こえてきました。

現在、法人化された国立大学というのは、どこでも縮小しか考えていないのです。その中で飛び出していこうとしているのは東京藝術大学だけです。大学といっても、じつとしていたらだめなんです。常に動いていることによって、いろいろなものを吸収し、そしてまた逆に発信して、伝え合っていくことがこ

れからの大学には必要だと思っています。

今回の連携に、私は大変感謝しております。同時に、継続は力なりという言葉もございますし、先ほどの醸造という言葉もございすので、今後いい形で繋げていきたいと思っています。日本を代表する広告クリエイターである、電通の杉山恒太郎さんが特別教授として本学に来てくださり、非日常を注入してくださる。こういった外からの非日常の注入がないと大学は、社会性のない昔語りのところになってしまいます。成田最高顧問に今回の対談をお願い致した理由はそういったところにあります。本日はいただいた様々なお話を吸収し、電通との連携を継続しながら、両者の関係をより醸造し育てていきたいなと思います。

成田 教えるだけではなく、実践をしていくという意識を共有していくことが重要なのではないのでしょうか。そうすることで人は動かされると思うのです。私どもの企業の歴史と藝大の歴史を踏まえて日進月歩し、この共有感を大切にしていかなければならないと思います。

宮田 芸術にも科学的、経済的な裏づけが必要であり、それにもとづいて活動しております。芸術と連携していくというのは、企業にとつても大きなステータスになるのではないのでしょうか。今後は、そうした連携や活動を評価してくれるところができるといいですね。そういった目標も含め、国や自治体を含めた協力関係を築いていくことがとても大事になってくると思います。

本日はお忙しいなか本当にありがとうございます。

*4 鬼十則

1. 仕事は自ら創るべきで、与えられるべきでない。
2. 仕事とは、先手先手と働きか掛けて行くことで受け身でやるものではない。
3. 大きな仕事と取り組め、小さな仕事はおのれを小さくする。
4. 難しい仕事を狙え、そしてこれを成し遂げるところに進歩がある。
5. 取り組んだら放すな、殺されても放すな、目的完遂までは……。
6. 周囲を引きずり回せ、引きずるのと引きずられるのでは、永い間に天地のひらきがでる。
7. 計画を持って、長期の計画を持っていれば、忍耐と工夫と、そして正しい努力と希望が生まれる。
8. 自信を持って、自信がないから君の仕事には、迫りも粘りも、そして厚みすらがない。
9. 頭は常に全回転、八方に気を配って、一分の隙もあつてはならぬ、サービスとはそのようなものだ。
10. 摩擦を怖れるな、摩擦は進歩の母、積極の肥料だ、でないと君は卑屈未練になる。

*5 寄附講座（コンテンツ産業講座）

東京藝術大学より、映像関連企業でもある 株 電通に協力要請する形で、二〇〇五年十二月に東京藝術大学と電通との間で産学連携に関する協定書を締結した。

この産学連携の目的は、東京藝術大学大学院映像研究科と電通が共同して先端的なメディア・コンテンツの研究・創造を行うとともに、多くのメディア関連企業の参加の場を設け、新しいメディアコミュニケーションのあり方を探ることである。

主な活動として、二〇〇六年度は杉山常務執行役員が特別教授として主宰する寄附講座を開講し、近年躍進が目覚ましい我が国のアニメーション映画に関するクリエイター、プロデューサー、著作権問題の専門家などをゲストに迎え、東京藝術大学教員ならびに大学院生とともに、三軒地所、ベネッセ、ソフトバンク、WOWOWなど企業の参加を得て講座を運営した。

「卒業生インタビュー」

藝大120年の現在形・未来形

各界で活躍中の卒業生四人が、藝大で学んだ経験がどのように生かされ、影響を与えてきたかを語り、次代へのメッセージを送る。

松井冬子

日本画家

美術に取り組みストイックな姿勢



美術を極めて世界に出たい、という思いを実現するには、まず第一歩として日本の芸術教育機関の最高峰である東京藝術大学に入学、卒業できなければならぬと思っていました。

超難関校である藝大には六度受験。長い浪人生活は心を蝕み、諦めようと思ったこともありましたが、「諦めないと思つたときこそ物事は始まるのだ」と粘つて挑戦し続けました。その決してひるまない気持ちの後々まで私の糧となっています。

小学校三年のとき、ダ・ヴィンチの「モナ・リザ」を見て芸術家は最強であると感じました。そのため初期は油絵を勉強していたのですが、浪人中に「源頼朝像」や長谷川等伯の「松林図屏風」といった傑作を見て、日本美術の素晴らしさを再確認しました。私にはとても新しく、フレッシュに映つたのです。またその禁欲的ともいえる地道な姿勢は自分の性分に最も適した技法と性質であると感じ、油絵から日本画へ移りました。

藝大に入るまでは「鉄線描」のような伝統技法の習得を延々とやるものと想像していました。来る日も来る日も、墨で均一に線を引くと聞いていたので、それ

を期待しつつ、修業として楽しめたらと思つていたのですが、それは東京美術学校時代の話でした。実際は入学時に、教授が岩絵の具の溶き方などの専門的な技法について細かく指導してくださつて、あとはもう自由に描きなさい、という感じでした。

藝大の素晴らしさは、何よりもまず学生の学ぶ姿勢、質が高いことです。私は学部四年、修士・博士五年と九年間、藝大で学生・院生生活を送りました。藝大は、放任であるがゆえに、自分の意志で全てが決まってくるのです。遊ぼうと思えば遊べる環境にありながら、多くの学生は自主的にストイックに創作に取り組んでいます。知的な好奇心が健在で、学生同士が啓発し合い、お互いに知を遊び、視野を拡張し合うという補完関係が得られるのです。

真剣に問題意識をもつて学ぶ気になれば、時間はむしろ足りない。このような環境に九年間も身を置いたことは自らの思考を促す礎を担うものとなりました。

とくに日本画と現代美術を分けるつもりはありません。私は「日本画とは技法である」という考え方に基つきながら、自分自身がフレッシュに感じられる美術

を作つてゆくという姿勢で取り組んでいます。

藝大在学中から「博士号取得」はアイデンティティーを確保するための重要な目標でした。その目標のために学部の四年間はまず技術を磨くこと、人間性への深い洞察、何が好きで何が嫌いなのかを明確にする時期と考え、修士の二年間で論理的思考の重要性と位置確認をし、そして博士の三年間で結果を出力したつもりです。

藝大で長い間勉強させていただきましたが、少なからず自己補完プログラムは計画的に進んだのではないかと思っています。



「浄相の持続」2005

松井冬子（まつい・ふゆこ）

一九七四年静岡県生まれ。

二〇〇二年東京藝術大学美術学部絵画科日本画専攻卒業。二〇〇四年東京藝術大学大学院美術研究科修士課程絵画専攻日本画研究分野修了。二〇〇七年東京藝術大学大学院美術研究科博士後期課程美術専攻日本画研究領域修了、博士号（美術）取得。

二〇〇五年「松井冬子展」を成山画廊（東京）で開催。「MOTアニュアル2006」2006年「日本画展」から「日本画展」へ（東京都現代美術館）二〇〇六年「日本画展」（横浜美術館）二〇〇六年「日本画展」などのグループ展にも参加する。二〇〇七年十一月に成山画廊にて個展を開催を予定している。二〇〇六年東京藝術大学卒業制作・野村賞を受賞。

伊藤有壹

アニメーションディレクター

進化する「アニメーション」表現



伊藤有壹 (いとう・ゆういち)

一九六二年東京生まれ。一九八五年東京藝術大学美術学部デザイン科卒業。
一九八八年までSFXプロダクション(株)白組に在籍。一九八八年CGプロダクション(株)アクセスの設立に参加。一九九五年より三年間のフリーランスを経て一九九八年「TOONJAP」を設立。
クレイ(粘土)を駆使したアニメーションで、多くのテレビCMやTV番組、ミュージック・ビデオを制作。代表作に一九九五年より放送されているNHK教育テレビのプチプチアニメ「ニャッキ」(第一回文化庁メディア芸術祭アニメーション部門優秀賞受賞ほかがある。また二〇〇六年には美術館企画展「伊藤有壹アニメーション展「TOONJAP」」(広島市現代美術館)を開催。
東京藝術大学美術学部デザイン科非常勤講師、沖縄県立美術館デザイン科非常勤講師、大阪芸術大学キャラクター造形学科客員教授を務める。

藝 大では美術学部デザイン科でグラフィックデザインを勉強していましたが、当時から「アニメーション」表現に惹かれるところがあって、学内サークル「動画部」や学外制作団体での活動もしていました。

授業では「映像概論」などを通して、日本テレビ出身で「11PM」などにかかわった内山昭太郎先生が、世界中のコマシーシャルやアニメーションを見せてくれたのが印象に残っています。内山先生はテレビ文化のパワーをつくり上げてきた方で、映像を目指す藝大生にも大きな恩恵をもたらしてくれました。

ぼく自身も藝大の非常勤講師として、学生に二か月間で一本の立体アニメーションをつくらせたことがあります。「見る側」から「作る側」になってみると藝大生は作品のイメージはもっているのですが、アニメーション表現は技術の集積でもあり、それを知らないとなかなか結果にまでたどり着けないところがあると感じました。

ぼくが卒業制作で作ったアニメーション作品は、16ミリフィルムで撮影された「動くグラフィックデザイン」みたいなものでした。発想はコンピューターグラフィックス的でしたが、手で作画しています。その後ビジュアルエフェクツの大手スタジオに勤務し、モーションコントロールカメラや、コンピューターソフト

ウェアを駆使して映像を作る仕事に一〇年ほど費やしましたが、自分のイメージと当時のコンピューターの性能が折り合わなかったのでしょうか。気がついたらツールが粘土(クレイ)に化けていました。一九九〇年の「広島国際アニメーション映画祭」に、自主制作で透過光を用いた35ミリフィルムの作品が入選しましたが、そこで世界には凄い作家がいくらでもいることに気づかされます。クレイアニメーション作品『ウォレスとグルミット』(ニック・パーク監督)が、世界中の映画祭で賞を取りまくっていたんです。粘土という素材が全く忘れられている時代であって、そこに振り向かせる鮮やかに世界中が注目しました。一九九四年にニック・パークの天才の謎が解きたくて、彼が育ったイギリスの「アードマン・スタジオ」を訪ねたことがあります。バナナの熟成倉庫を改造したスタジオを案内してもらいながら過ごしたそこで、一日がその後の十数年をつくってきたといっても過言ではありません。

海外でやっていくべきか迷いつつイギリスから帰ったところ、NHKから話があって「ニャッキ」をプレゼンテーションしました。結果的にアイデアが採用になって、粘土の棒一本でどこまでの表現ができるかという実験劇場が公共放送でスタートしました。

裏テーマは「子供にも通じるアナログとデジタルの自然な融合」であり、楽しみながら作り続けて気がつけば十三年目に突入しました。



NHK プチプチアニメ『ニャッキ!』©Y.ITO.NHK.NEP

今や世界中でアニメーション教育やその映画祭が強化されています。NATIONAL FILM BOARD OF CANADA(カナダ国立映画制作庁)では、国の予算で制作費を出して優秀な作家にアートアニメーション作品をつくらせています。藝大にアニメーション学科が設置され、それに近いシステムで、日本の優秀な才能が集まるのが理想ですね。国立大学というのはそういう面で大変有効ではないでしょうか。いまはコンピューターを操る能力をもった若い人がいっぱいいるわけですね。そういった才能がもつと伸びるような環境を提供できるとしたら、藝大がもつともふさわしい場所なのではないかと思っています。

9

高木綾子

フルート奏者

芸術家たちが時間を共有する場所



指揮者のシャルル・デュトワ氏（左）、リサ・パ
ティアシュヴィリ氏（右）と

藝 高から、藝大、大学院、講師として
も二年目になるので、一二年近
く上野でお世話になっています。

私はもともと母の手ほどきでピアノを
やっていました。そのころから藝大に進
んでチャイコフスキーコンクールで入賞
ということを見ていたのですが、小学
校三年生くらいのときにオクターブが届
かなかったのです。ピアノを諦めてほか
の楽器にしようというときに、母が父に
プレゼントしたフルートが家にあり、そ
れが始めるきっかけとなりました。

中学校二年生のときに父の転勤でベル
ギーへ行くことになり、赴任期間が三年
だったのですが、高校受験と重なってし
まったのです。向こうではパリ国立音楽
院（コンセルバトワール）に進みたかつ
たのですが、ソルフェージュや音楽理論
が難しいと聞いて、フランス語も話せな
いので、まずは、基本的なことを日本で
勉強してから留学しても遅くない、と日
本で一番良いといわれる音楽系の高校と

いうことで藝高を受験しました。

藝大では金昌国先生に付きっきりで教
えていただいたのですが、先生は学生の
性格をよく見抜かれる方で、負けず嫌い
の私は厳しくされた分だけ頑張ることが
できたと思います。

管楽器に関しては、昔から金管、木管
と科ごとの学生が集まれる部屋があり、
フルートの学生でも金管楽器の部屋に行
けば、金管の学生と話すことができたの
で、そのような部屋があつてよかったと
思います。そのお蔭で上下間の交流をと
ることもできました。

非常勤講師として若い学生には「音楽
の事だけでなく、いろいろな経験をした
ほうがいいよ」とアドヴァイスをしてい
ますが、いまはクラシック音楽だけを聴
くという人は少ないですね。逆に情報が
溢れすぎていて、強いこだわりがないと
いうところが音楽に表れているかもしれ
ません。昔の演奏家には一本芯の通った
ものがあつたと思うのですが、そいう

部分が欠けているかもしれない、と時々
思うことがあります。

藝大は音楽家の卵から芸術を極めてい
る方までが、ひとつの校舎に集まり、時
間を共有しているという点でも、ほとん
どに素晴らしい場所だと思います。音楽
全般を網羅していますし、隣には美術学
部の人々がいる。学内に音楽堂があつて、
近くには東京文化会館や多くの美術館も
あります。音楽をはじめ芸術を学ぼうと
いう学生にとっては、本当に飽きのこな
い環境だと思います。

若い人の新しい試みを支援するという
部分では、法人化されてからかなり積極
的になったと思います。ただ逆に伝統の
部分を大事にしたいと思うことも
あります。いま若い先生が多いのです
が、すでに退任された先生や、現在学外
で活躍されている演奏家の方に、特別授
業や公開レッスンへ来ていただくような
機会が増えると生徒だけでなく、私たち
講師にも刺激になると思います。



高木綾子（たかぎ・あやこ）

一九七七年愛知県豊田市長生まれ。
東京藝術大学附属高校・東京藝術大学音楽学部器楽科（フルート）を経て、同
大学院修士課程修了。これまでにフルートを西村智江、橋本量至、G・ノアッ
ク、小坂哲也、山崎成美、金昌国、P・マイゼンの各氏に、室内楽を岡崎耕治
氏に師事。
大学在学中より本格的な演奏活動を開始し、国内主要オーケストラとの共演は
もとより、新イタリア合奏団、シュトゥットガルト室内管弦楽団、ミラノ・ス
カラ音楽合奏団、バリ室内管弦楽団の日本ツアーのソリストとして同行。各地
でのリサイタルや室内楽の演奏会にも出演し、CD録音も発売を行っている。
現在、東京藝術大学音楽学部器楽科非常勤講師。

野村萬斎

狂言師

狂言的身体から導く普遍性



野村萬斎 (のむら・まんさい)

一九六六年東京都生まれ。一九七〇年「綱渡」で初舞台。
一九八九年、東京藝術大学音楽学部邦楽科能楽専攻卒業。一九九四年より一九九五年まで文化庁芸術家在外研修制度で渡米。
国内外の能楽公演はもとより、自ら主宰する「狂言ござる乃座」の活動をとおりして狂言の普及に努める。加えてテレビドラマ、映画、現代劇への出演や、古典の技法を駆使した舞台演出など幅広く活躍する。世田谷ハブリックシアター芸術監督。
現在、東京藝術大学非常勤講師。

私

が入学するまで藝大の能楽専攻で狂言を学んだ学生がなく、私が狂言を専門に学んだ最初の卒業生となりました。若い時期に藝大のような、芸術を志すさまざまなジャンルの人間が集まる環境に身をおくことは、大変いいことだったと思います。私は子供の時から舞台上に立っていましたから、入学当初は、あまりに普通の、いわゆるアマチュアの学生が多く、藝大といえどもこれからプロになる人を養成するところなのだ、ということを知り、それは驚きでもありませんでした。

私がいま講師として教えているのは、狂言を専門に学ぶ学生ではなく、必修になっている日本舞踊や、洋楽・美術の学生です。ですからあまり専門的なことではなくて、狂言から発想する表現、身体表現一般として共通することを教えます。

芸術の世界でも専門が細分化されていると思いますが、どのジャンルであつても身体的に研ぎ澄まされる人が求められています。そこで狂言の立場から、身体のバランス感覚や全身で行う呼吸法、間の発想といったことを中心に教えているのです。なかでも「間」や休符に対する

考え方、音に対する感性の違いをはじめとして、日本の音楽にしかないものがあることを学生には気づいてもらいたいと思っています。たとえば、イギリスで囃子の拍を教えたことがあるのですが、絶対的な拍の概念が違います。こういったことは作曲にも役立つでしょうし、身体を媒介に美術の表現ともあながち遠い話ではないと思っています。

このように私は、イギリスに留学した経験を活かして、横のつながりを意識した授業をしているつもりです。邦楽の学生にはヒエラルキーの世界から離れてものを考えることを、また洋楽や美術の学生にもそれぞれの分野に持ち帰って私の授業で得たことを少しでも刺激にしても

らえればと思っています。

昨年、演奏芸術センター主催の邦楽アンサンブル《今昔物語》で演出の依頼を受けたとき、このような仕事は藝大の外側にある一般の社会にどこまで届いているのかということを考えました。基礎体力と発信力というのでしょうか、藝大は職人を作るところなのか、創造し発信していくところなのか。両方を兼ね備えているのが理想だと思いますけれど。

藝大にはいたるところに「ものを考える機会」が転がっています。学生には、せっかくなので藝大に来たのだから、自分の専門に閉じこもらず貪欲にいろいろなものを吸収してカルチャーショックを受けてほしいですね。



狂言ござる乃座公演で「釣針」の太郎冠者を演じる
撮影：政川慎治

東京藝術大学創立120周年記念事業

創立120周年事業の概要

池田政治

創立一二〇周年という節目を、どのように位置づけ、そのコンセンサスを学内でどう造りあげていったら良いのか。実行委員会是一年間に渡って基本理念と具体的な内容の検討を進めてまいりました。創立一〇〇周年から現在までのこの二〇年間の変化を辿ってみましょう。

一つには大学美術館、演奏堂ができたことがあります。このことにより美術、音楽の独自の展示、演奏、企画の機会が飛躍的に高まったといえます。二つめには国立大学の法人化が挙げられます。法人化にともなう大学の社会への貢献が今まで以上に強く求められるようになりました。また、これと並行して予算の縮小化という負の現実もあります。そのため外部資金の導入についても積極的に取り組まなければなりません。三つめは二〇年前には想像もつかなかった情報革命があります。情報処理技術の飛躍的發展によって学内外のネットワークづくりとコミュニケーションの方法が根本的に変化し、同時に速やかな情報公開も求められるようになりました。四つめとして藝大の規模の拡大ということがあります。取手校地に続いて現在は横浜、北千住へとキャンパスが広がっています。これによって従来の美術、音楽という学部の垣根を越えた、ひとつの「共同体」としての「藝大」という認識が生まれつつあるということが五つめに挙げられます。

一二〇周年の記念事業は、このような状況を十分に踏まえ、新たなアイデンティティーの構築を目指すということに大きな意義があります。

具体的には、年間を通じて行われる研究・教育の成果を公開し、検証していくことです。この方針に立ち、実行委員会では「記念事業七つの柱」構想を打ち出しました。昨年十二月に行った記者発表をはじめ、総合プログラムとしての印刷物で企画の詳細を公表するとともに、藝大ホームページにて最新の情報を随時提供しております。柱の一つである「社会連携センター」の開設もこの四月に実現し、「藝大」と社会を結ぶ窓口も一元化されました。この社会連携センターは既に東京・丸の内地域との連携プロジェクト「藝大アーツイン丸の内」をモデルケースとして活動を開始しております。

記念企画の実施にあたり、資金面においては自助努力のみならず外部資金の導入が前提となります。企業・財団・自治体・関連団体をはじめ、個人の方々に至るまでの幅広いご理解が必要です。幸い、現在まで暖かいご賛同をいただいております。

記念事業の進行も半ばにきたところですが、今後も引き続きご支援の程、宜しくお願い申し上げます。

(いけだ・せいじ／学長特命 創立一二〇周年記念事業担当・美術学部デザイン科教授)



“創立120周年記念事業ロゴマーク”
このロゴマークは本学美術学部デザイン科
視覚系3研究室合同により制作されたものです。

「岡倉天心
—芸術教育の歩み—」展

天心の広範な 活動から学ぶもの

古田 亮

二〇〇七（平成十九）年は、東京美術学校の創立から一二〇周年を迎える記念の年にあたります。戦後に東京美術学校を継承した東京藝術大学は、これを記念してさまざまな記念事業を実施いたしますが、その中心事業のひとつとして大学美術館を会場として開催される展覧会が「岡倉天心—芸術教育の歩み—」です。

この展覧会は、本学の創設に深くかわり、開校まもなく校長となった天心・岡倉寛三（一八六三—一九二三）の業績を、東京美術学校在任時代を中心として、多角的に検証、紹介するものです。天心の行った美術に関する仕事は、美術学校の教育環境の整備や学生指導にとどまらず社会連携制作の推進、美術団体の支援、美術行政の整備のほか、博物館事業、美術史の編纂、評論、文化財保護など広範囲にわたっています。本展では、天心の在職期間である一八八七（明治二十）年から一八九八（明治三十一）年までの活動を中心に構成しながらも、野に下って以降の仕事についても「芸術教育の歩み」という観点からとらえ直していきます。すなわち、天心の遺志をついだ歴代教官や卒業生たちの活動を追いながら、今日の東京藝術大学に引き継がれてきたものに注目していこうというものです。そのことによってこれからの藝大が天心から改めて学ぶべ

きことはなにか、という問題も浮かび上がってくるでしょう。

この展覧会は四つの章で構成されています。第一章では、写真や資料等によって、岡倉天心の全貌を概観するようなイメージ展示を予定しています。大学美術館、大学図書館が所蔵する資料に加えて教育資料編纂室が長年かけて研究し、蒐集してきた東京美術学校および天心に関する貴重な資料によって天心の業績をたどりま。

第二章は天心の理想というテーマのもとに、まず、美術学校が蒐集した古美術作品によって天心の日本美術に関する感性をさぐります。《絵因果経》（国宝）をはじめ、天心の眼が集めたすぐれた古美術や模本は、そのまま美術教育のよき教材でもあったのです。次に、初期美校教授陣の制作活動を紹介します。天心に選ばれた教授陣は天心の理想の実践者であったともいえるでしょう。狩野芳崖《悲母観音》（重文）、橋本雅邦《白雲紅樹》（重文）などその代表作が出品されます。また、日本絵画協会、日本美術院、文展といった天心主導の展覧会出品作から、天心とのかかわりの深い作品を選んで展示します。最後に天心没後にその理想を受け継いだ横山大観や小林古径らの優品を選び、

天心が近代美術に果たした役割を考えます。

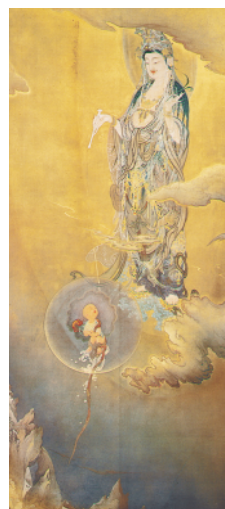
第三章は、芸術教育の現場という観点から、天心在职時代を中心に美校の授業内容を紹介します。学生制作品だけでなく当時使われていた教材などを織り交ぜながら教室の雰囲気を感じていただくというものです。

そして最後となる第四章では、芸術と社会というテーマに基づき、天心がはじめたさまざまな社会連携事業について紹介いたします。依頼によって野外彫刻、銅像、室内装飾品を制作する事業、あるいは文化財保存の一環として古美術の一級品を模写・模造する事業など、今日でもその価値を失わない事業の成果を紹介いたします。

二〇〇四（平成十六）年に東京藝術大学は国立大学法人となりました。大学の運営形態が大きく変化している現在、私たちが天心から学ぶべきことは少なくありません。この展覧会が今後の大学のあり方を探っていくひとつの契機になることを期待しております。

なお、関連事業として、展覧会の内容を補完する意味でシンポジウムを三回開催する予定です。

（ふるた・りょう／大学美術館准教授）



2



1



3

- 1：下村観山「天心岡倉先生 草稿」
- 2：狩野芳崖「悲母観音」
- 3：横山大観「村童観猿翁」

【展覧会概要】

東京藝術大学創立120周年企画「岡倉天心—芸術教育の歩み—」

会期：10/4（木）～11/18（日）

会場：東京藝術大学大学美術館

主催：東京藝術大学、NHK

創立120周年 記念音楽祭

松下 功

今年度、東京藝術大学では創立一二〇周年を記念して、数々の催し物が計画されています。その一つとして、二〇〇八（平成二十）年一月四日から六日までの期間、旧東京音楽学校奏楽堂と東京藝術大学奏楽堂との連携による《創立一二〇周年記念音楽祭》が開催されます。お正月の三日間に、国内外で活躍する東京藝術大学の教員、学生、卒業生が一体となって、一〇二〇年をふり返ってをテーマとした演奏会が繰り広げられます。声楽科、ピアノ科、弦楽科、管打楽器科、邦楽科の豪華な演奏者たちによる夢の饗宴、楽理科、音楽環境創造科による藝大の足跡を辿るシンポジウム、また、日本の電子音楽の歴史を紐解く展示会も予定されています。この記念音楽祭は、単に東京藝術大学の歴史を提示するに留まらず、日本における音楽教育の歴史を検証する大きな意義を持っています。

さらに、二〇〇八年二月二十日には、旧奏楽堂で東京音楽学校の「第一回定期演奏会」が再現されます。藝大が誇る現役教員と学生たちによって、滝廉太郎、幸田延、幸姉妹らが演奏した作品を、彼らが演奏した当時のピアノにより再現します。

（まつした・いさお／演奏芸術センター教授）

予定開演時間	会場	演奏会タイトル 出演者	詳細
1月4日（金）			
14:00	旧奏楽堂	くその時、西洋では！ ～東京音楽学校創設期と その周辺のピアノ作品～ ピアノ科教員 卒業生 松本和将 有森博 迫昭嘉 高良芳枝 井上二葉 橘高昌男 野原みどり	グリーグ：抒情小品集 第3集 op.43（1886） スクリャービン：3つの小品 op.2 より 第1番 練習曲嬰ハ短調（1887） チャイコフスキー：ドゥムカ op.59（1886） ブラームス：幻想曲集 op.116（1891-92） ドビュッシー：小組曲（連弾）（1886?-89） フォーレ：舟歌第4番 op.44（1886）／夜想曲第5番 op.37（1884?） フランク：前奏曲、コラールとフーガ（1884）
17:00	奏楽堂	く日本近代音楽史に見る伝統の響き 邦楽科教員 卒業生 他（計280名）	長唄・長唄三味線・邦楽囃子・常磐津：「新一つとや」（約27分） 箏曲（山田流）：「江の島曲」（約22分） 箏曲（生田流）：「日蓮」（約26分） 能楽（宝生流）：半能「高砂」（24分） 能楽（観世流）：舞囃子「屋島」（10分） 日本舞踊・清元：「青海波」※曲順未定
1月5日（土）			
11:00	5-109	レクチャー・シンポジウム く藝大120年の音（入場無料） 「120年前のアメリカ音楽」 楽理科教員 他 （司会）船山隆	11:05～ 基調レクチャー「音楽取調掛とアメリカ」 11:45～ シンポジウム「東京音楽学校とアメリカ音楽—教育と創作を中心に—」
14:00	旧奏楽堂	く日本の弦楽教育・草分けの時代 玉井菜採 漆原 朝子 浦川宣也 河野文昭 ジェラルド・ブーレ 粕谷（多）美智子 大橋雅子 鈴木慎崇	東京音楽学校創設時期に行われた幸田延、幸姉妹、滝廉太郎らによる演奏や、お雇い外国人教師による演奏曲目を中心に、時代背景などをトークを交えて行う。 ヴェーバー：ファンタジー・アパッショナータ ヴィエニャフスキ：レグンデ グリーグ：ヴァイオリン・ソナタ第2番ト長調 幸田延：ヴァイオリン・ソナタ 変ホ長調／ニ短調 ヴェルクマイスター：チェロのための作品集より「歌の情景」「マズルカ」 ルービンシュタイン：ヴィオラ・ソナタ
17:00	奏楽堂	く藝大ブラスの醍醐味・ 蘇るサウンド 管打楽器科教員 卒業生 指揮：三石精一	ヴァーグナー：ニュルンベルクのマイスタージンガーより第1幕前奏曲 ホルスト：組曲第2番 レスピーギ：ローマの松
1月6日（日）			
11:00	5-109	シンポジウムく日本電子音楽の黎明期 ～藝大音響研究室の活動～（入場無料） 音響研究室関係者	〔パネリスト〕南弘明 白砂昭一 則安治男 鳥越けい子
14:00	旧奏楽堂	く日本声楽曲の黎明期 声楽科大学院生 ピアノ科非常勤講師 多田羅迪夫	「庭の千草」「アニー・ローリー」等の、今に残る文部省唱歌の当時の和声付けの再現。明治期の外国人教師R.von Koeber、Werkmeister達の歌曲作品紹介等、日本声楽曲の黎明期の音楽事情を解明する。
17:00	奏楽堂	オーケストラ・コンサート く藝大120年をふり返って オルガン・鈴木雅明 フェスティヴァル合唱&オーケストラ（卒業生、教員による） 指揮：小林研一郎 ソプラノ：林康子 アルト：伊原直子 テノール：吉田浩之 バス：福島明也	J.S.バッハ：前奏曲とフーガ変ホ長調BWV552／ オルガン小曲集よりコラール「われら悩みの極みにありて」BWV641 ベートーヴェン：交響曲第9番

120周年記念企画トピックス

学長と語るろう1 （奏楽堂トーク&コンサート）

四月十四日、東京藝術大学創立一二〇周年記念事業の幕開けとなる「学長と語るろう1 トーク&コンサート」が開催された。会場の奏楽堂では、約七百名の参加者が約二時間にわたり、対談と演奏会を楽しんだ。

第一回目のゲストには、新制東京藝術大学の第一期生で、後にソニーの経営者となった大賀典雄氏を迎え、学生としては約二十年後輩にあたる宮田学長との間で、なごやかに対談が進んだ。なかでは、大賀氏が東京藝術大学第一期生当時に、大変高価だったテープレコーダーの重要性を学生の立場で国に訴え、教育環境の改善を求めた逸話が語られた。そうした決断力と実行力に優れた人柄は会社経営の面でも発揮され、CD（コンパクトディスク）を開発したソニー時代に、最大収録時間をオペラ一幕分あるいはベートーヴェンの交響曲第九番が収録できる容量にするよう主張し、実現をみた。しかし、そうした決断は決して一方的なものではなく、人の「リアクト」に応える柔軟な姿勢が大切であると話し、学生に応える教育者の姿勢として宮田学長も同じ意見だとの話となり、満場の拍手を浴びながらトークを終了した。

なお、休憩を挿んだ第二部では、大賀氏のリクエストにより、シューベルト「ピアノ五重奏曲イ長調『鱈』」が、音楽学部学生によって演奏された。



ケレンー主張する色彩— KEREN Colors be



四月十九日から五月三日まで、「ケレンー主張する色彩—KEREN Colors be」が開催され、会場となった陳列館には約四〇〇名の入場者があった。

この展覧会は、学生や教員として、塗装造形工房と関わった本学出身作家二十四名が、漆などの自然塗料および世界で広く使用されている合成樹脂などの新しい塗料にスポットをあて、作家の視点から美術素材として塗料を研究してきた成果展である。またこの研究は、日本ペイント（株）からの五年間にわたる教育研究助成金によって実現されたものである。

これら成果の発信は、展覧会開催を主軸とし、塗料と漆に関する四篇の論文と作品集の出版、インタビュを通して作家の個性を引き出したDVD制作を行うなど、多面的に展開された。なお、出版物にはすべて英文を付しており、送付した海外の大学や美術館等の関係機関では、大きな関心を呼んでいる。

さまざまな専攻の若きアーティストが一同に会し、垣根を越えた横断型企画で、また、企業との社会連携という形で研究成果の発表が実現し、今後の本学から社会へ向けての発信のあり方について大きな提案となった。

藝大Design Project in ADACHI —足立区をフィールドにした 藝大生によるデザイン提案—

四月二十四日から五月六日まで、足立区千住のシアター1010/アトリエにおいて「藝大Design Project in ADACHI」が開催され、約六〇〇名の入場者があった。

これは、地域振興・街の活性化、特色ある商品開発などを目標に、デザイン科の修士課程一年生二十七名が、平成十八年度の授業として取り組んだデザイン開発プロジェクトである。

会期中に行われたシンポジウムでは、学生の若々しい発想が披露される一方で、長年事業に携わり、地域で活動してきた方々のアドバイスや、区内に暮らす市民の率直な感想が会場から寄せられ、活発な質疑応答が行われた。授業としての課題を離れた各企画は、今後、学生の自主的な活動によって実現が目指されることとなる。

普段の授業課題とは少し違った、より具体的な対象（足立区）への提案は、今後学生たちによって実現を目指すこととなる。



藝大プロジェクト'07 〈グリーグ&シベリウス〉 劇音楽《ペール・ギュント》



六月八日、藝大プロジェクト'07〈グリーグ&シベリウス〉劇音楽《ペール・ギュント》の上演があり、会場となった奏楽堂には、第一回目約八〇〇名、第二回目約九五〇名の入場者があった。

本年は、北欧の作曲家、グリーグの没百年、シベリウスの没五〇年の記念の年にあたり、世界各地で彼らの作品が演奏されている。本学では、四回のレクチャー&コンサート等で彼らの作品を取り上げ、その作品について考察してきた。その中でも、劇音楽《ペール・ギュント》全曲上演は、本国ノルウェーでも希少で、学内外に大きな反響を呼ぶものとなった。

今回は指揮に井上道義、語りに井上芳雄を招き、照明、装置も加わる本格的な舞台作品として上演された。ペール・ギュント、ソルヴェー等々のソリストには大学院生が、合唱には声楽科の有志が参加し、歌は原語のノルウェー語、語り、セリフは日本語で行われた。

この作品を通じて、グリーグの抒情性溢れる音楽の真髄に触れるまたない機会となった。今回の上演には、ノルウェー王国大使館より多大なる協力を得、また、藝大フィルの好演もあり、聴衆から大きな賛辞が送られた。チケット発売当初より反響が多く、異例の一日二公演となったこの上演は、NHKの「芸術劇場」でも一部が放映され、今年のグリーグ公演中最も優れた上演と高く評価された。

東京藝術大学
120年
年表

東京音楽学校



東京美術学校

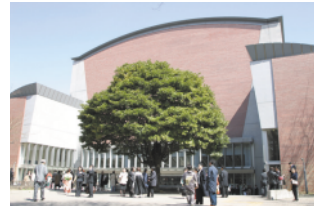
年号	藝大の動き	美術学校・美術学部の動き	音楽学校・音楽学部の動き	社会の動き
一八八七年（明治二十）	文部省直轄学校として東京美術学校（浜尾新校長事務取扱）、東京音楽学校（伊沢修二校長）を設置（前身は文部省に明治十二年設置の音楽取調掛と明治十八年設置の図画取調掛）。東京美術学校に普通科と専修科（絵画科（日本画、彫刻科（木彫）、図案科（のち美術工芸科と改称。金工、漆工））が、東京音楽学校に予科、師範部、専修部を置く			
一八八八年（明治二十）		東京美術学校は小石川植物園内から現在地に移転		
一八八九年（明治二十）			東京音楽学校は学科を予科、本科（師範部、専修部）とし、研究科と選科を置く	大日本帝国憲法発布
一八九〇年（明治二十）		岡倉覚三、東京美術学校長に就任	東京音楽学校は上野東四軒寺跡から現在地に移転。東京音楽学校存廃論争起こる	教育勅語発布。第一回帝国議会召集
一八九三年（明治二十）			東京音楽学校は高等師範学校の附属学校となる（同三十二年再独立）	
一八九四年（明治二十）				日清戦争開戦（一九〇五年まで）
一八九六年（明治二十）		東京美術学校に西洋画科、図案科を増設		
一八九八年（明治二十）		岡倉覚三、東京美術学校長を辞職。美術学校騒動起こる	東京音楽学校分校教場を神田に設置	
一九〇〇年（明治二十）			東京音楽学校本科に声楽部、器楽部、楽歌部を設置（明治四十二年楽歌部は廃止）	
一九〇三年（明治三十）	東京美術学校、東京音楽学校に専門学校令適用			日露戦争開戦（一九〇五年まで）
一九〇四年（明治三十）				
一九〇六年（明治三十）		旧帝国図書館煉瓦造書庫および木造建物		
一九一二年（明治四十五／大正元）				明治天皇崩御。大正に改元
一九一四年（大正）		東京美術学校改築工事竣工		第一次世界大戦に参戦
一九二二年（大正十一）			東京音楽学校敷地を帝国図書館に割譲移管	
一九三三年（大正十二）				関東大震災
一九三五年（大正十四）	美・音両校に陸軍現役将校配属			大正天皇崩御。昭和に改元
一九三六年（大正十五／昭和元）				世界恐慌
一九三九年（昭和四）				満州事変
一九三九年（昭和四）				上海事変
一九三九年（昭和七）			東京音楽学校本科に作曲部を設置	二・二六事件
一九三九年（昭和七）			東京音楽学校に邦楽科を設置	日中戦争開戦
一九三九年（昭和十二）				太平洋戦争勃発
一九四一年（昭和十六）	美・音両校とも修業年限三カ月（翌年には六カ月）短縮。報国団結成			
一九四三年（昭和十八）	学徒出陣			



藝大アートプラザ



大学美術館



奏楽堂

一九四四年（昭和十九）				文部省は東京美術学校改革を断行
一九四五年（昭和二十）	美・音両校とも一年間授業停止			ポツダム宣言受諾。太平洋戦争終戦
一九四六年（昭和二十）	美・音両校合同の芸術祭開催			戦
一九四九年（昭和二十四）	学制改革に伴い国立の東京藝術大学設置。美術学部、音楽学部、附属図書館が置かれ、美術学部は絵画科、彫刻科、工芸科、建築科、芸術学科が、音楽学部は作曲科、声楽科、器楽科、指揮科、楽理科が置かれる	東京美術学校が男女共学となる		日本国憲法公布
一九五〇年（昭和二十五）				
一九五一年（昭和二十六）	聴講生制度発足		音楽学部は邦楽科を設置	朝鮮戦争勃発（一九五〇年～一九五三年まで）
一九五二年（昭和二十七年）	東京美術学校、東京音楽学校廃止		大学別科（音楽）を設置	
一九五三年（昭和二十八）	専攻生制度発足			
一九五四年（昭和二十九）	美術専攻科、音楽専攻科を設置		音楽学部附属音楽高等学校を設置（お茶の水）	
一九六〇年（昭和三十五）				日米安全保障条約改定
一九六三年（昭和三十）	大学院美術研究科、音楽研究科（修士課程）を設置。美術専攻科、音楽専攻科廃止	美術学部附属奈良研究室を設置（現美術学部附属古美術研究施設）		
一九六四年（昭和三十）				東海道新幹線開通。東京オリンピック開催
一九七〇年（昭和四十五）	研究生制度設置	芸術資料館を設置		日本万国博覧会（大阪）開催
一九七五年（昭和五十）	言語・音声トレーニングセンターを設置	美術学部はデザイン科を設置		
一九七七年（昭和五十二）	大学院美術研究科、音楽研究科に博士後期課程を設置			
一九八七年（昭和六十二）	東京藝術大学創立一〇〇周年記念事業開催。旧東京音楽学校奏楽堂を移築（上野公園内）			
一九八九年（昭和六十四）	平成元年			昭和天皇崩御。平成に改元。ベルリンの壁崩壊
一九九一年（平成三）	取手校地を開設			湾岸戦争勃発。ソビエト連邦解体
一九九五年（平成七）				阪神淡路大震災。地下鉄サリン事件
一九九六年（平成八）	国際交流会館を設置（松戸）	美術研究科に文化財保存学専攻を設置	附属音楽高等学校を上野校地に移転	
一九九七年（平成九）	演奏芸術センターを設置			
一九九八年（平成十）	大学美術館を設置（芸術資料館を転換）			
一九九九年（平成十一）		美術学部は先端芸術表現科を設置（取手校地）	新奏楽堂竣工	
二〇〇〇年（平成十二）	情報処理センター（芸術情報センター）を設置			
二〇〇二年（平成十四）			音楽学部は音楽環境創造科を設置（取手校地）	サッカーワールドカップ日韓大会
二〇〇四年（平成十六）	国立大学法人法の制定、国立学校設置法の廃止により国立大学法人東京藝術大学となる			
二〇〇五年（平成十七）	大学院映像研究科を設置（横浜校地）			
二〇〇六年（平成十八）	千住校地を開設。音楽環境創造科が移転			
二〇〇七年（平成十九）	東京藝術大学創立一二〇周年			

藝大の 歩き方

ー上野の杜のキャンパスガイドー

第7回★正木記念館

歴史ゆかしい「上野」という場所に校地を構え、
明治以来の伝統を誇る藝大の隠れた「名所」を
毎回テーマを変えて紹介する。



沼田一雅作「正木直彦像」



美術学校五代目校長を記念する

横溝廣子

上野公園から藝大に向かって歩くと
最初の角にあり、見上げると鬼瓦が屋
根を飾る建物が「正木記念館」である。
正木直彦（一八六二年―一九四〇年）
は、一九〇一（明治三十五）年―一九
三三（昭和七）年までの三十二年間東
京美術学校五代目の校長を務め、帝国
美術院院長、各博覧会審査官等を歴任
した人物である。正木記念館はその長
年にわたる功労を記念するために、陳
列館と隣接する東側の林の中に建設さ
れ、一九三五（昭和十）年八月に竣工
した。

本人の意思を尊重して純書院造の和
室をもつ耐震耐火の鉄筋コンクリート
造とし、その和室には一九〇一（明治
三十四）年に増築された渋沢栄一の滝
野川の別荘書院のために制作された橋
本雅邦（一八九〇年―一九八八年日本画教
授）作の襖絵と国華倶楽部から寄贈さ
れた高村光雲（一八九〇年―一九一五
年彫刻科教授）作の透彫の欄間を入れ
て、金沢庸治（一九三六年―四四年建
築科助教授）が設計に当たった。現在、
襖絵は美術館収蔵品として収蔵庫内で
保管しているが、今年十月に開催され

る藝大茶会の際には正木記念館の二階
を再び飾る予定である。襖の引き手は
香取秀真（一九三三年―四三年金工史
教授）作、欄間の縁などの漆塗りは六
角紫水（一九二四年―四四年漆工科教
授）作、電気器具は津田信夫（一九二
一年―四四年鍍金科教授）デザイン、
鬼瓦の下にある六葉金具は内藤春治
（一九四四年―六四年鍍金科教授）作
である。現存しないが、当時は入口の
上に山崎覚太郎（一九四三年―四四年
漆工科教授）作の電気時計があった。
そして伝聞によれば鬼瓦は北村西望
（一九一八年―四四年彫刻科教授）作
であるという。

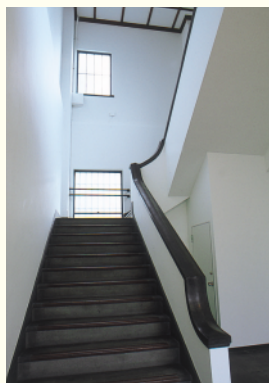
一階にはガラスの展示ケースに立体
作品を展示し、二階の和室には日本画
を展示した。和室の展示室は、今日で
は大変珍しいものとなっている。また、
正木直彦像が記念館と陳列館の間の中
庭に置かれているが、これは沼田一雅
（一九〇七年―三九年鍍金科教授）が
正木のために制作した当時わが国最大
の等身大の陶像である。

（よこみぞ・ひろこ／大学美術館准教
授）





1階展示室



2階和室



クラブ・

サークル

訪問

第6回

茶道部

岡倉天心が『茶の本』を著したように藝大と茶道には深い結びつきがある。「茶道部」は八十年以上の歴史と伝統をもち部員たちはそれぞれに違った目的意識を持ちつつお点前の緊張と、一服の美味しさを今日も楽しむ。

「形」を覚え、「形」にそって動く

高場泉穂

私たち東京藝術大学裏千家茶道部は、現在部員が二十七名（うち男性四名、女性二十三名）で、藝大のさまざまな学科、学年の生徒とほかの大学の数人の生徒からなっています。主な活動は、毎週金曜の稽古と年に数回の茶会で、部員それぞれが個々のペースで自由に参加できるような形をとっています。

今から約八十年前、藝大の前身である東京美術学校に茶道部は生まれました。当時の学長、正木直彦先生の日記『十三松堂日記』には、一九二五（大正十四）年六月六日、「学校生徒茶道部」の発会式が行われたことが記してあるそうです。こうして大学初の茶道部が藝大にできたのも、『茶の本』を著した岡倉天心が創設した学校であること、古代裂や陶磁器の研究に先鞭をつけた人物である今泉雄作が前年に茶道具に関する講義をしていたこと、茶道具に触れる



練習風景

2007年の初釜

機会が学生に与えられていたことなど、さまざまな面から考えて納得できることだといえます。その後、戦時中に活動が難しくなったり、東京美術学校が東京藝術大学へと変わる際に途切れてしまったりとさまざまな困難はあったようですが、その都度、部は何とか再興され今日に至っています。

上記の通り、長い歴史と伝統を持つ藝大茶道部ですが、私たちは何か特別なことをしているわけではありません。いたってシンプルに、ただお茶の稽古をしているだけです。

入部するとまずお茶の飲み方を練習し、そこから道具の扱い方、お点前の仕方、立ち振舞い、と茶道にまつわるさまざまなことを少しずつ覚えていきます。もちろん個人差はありますが、一年もすれば簡単なお点前ができるようになります。厳格に決められた「形」を覚え、その「形」にそって動くことは、傍目からみればくだらないことのように思えるかもしれませんが、「形」は自由に動く余地を残しているように私は思います。決められた同じ動作をするにもかわらず、いや同じ動作をするからこそ、そこに差異が生まれ個性が見えてくるのです。また、その決められた動作は、ふだん感じるこのない緊張を身体に要求します。背筋を伸ばし、丹田に力を入れ、集中すること。これは、茶道のみならず、私たち藝大生が従事している芸術活動にも、またふだんの生活にも活かせるものだと思います。

同じ茶道部とはいえ、部員はみな茶道をしている理由も意識の持ちようもそれぞれ違っているでしょう。ですから、個々がそれぞれに違った目的意識を持ちつつも、協力し、楽しく活動していけたらと考えています。そしてそこで得たものをみんなが日々の生活に少しでも活かせれば、それに越したことはありません。

人が点てたお茶は大変美味しいものです。毎週金曜日の夜、学生会館の和室で稽古をしていますので、興味を持った方は気軽に足を運び、茶を一杯飲んでみてください。

(たかば・みずほ／美術学部芸術学科四年・茶道部副部長)

教員は語る

第七回

― 藝大への期待・抱負・提言 ―

異業種と交流する刺激

司会 今回の教員は語る第七回は、バリトン歌手で声楽科教員の福島明也さんと脚本家・作家で映像研究科教員の筒井ともみさんをお招きしました。藝大の教員になられた今、お二人は何をお感じになっていますか。

福島 藝大を卒業してから、オペラや声楽の活動をしながらいくつかの大学で教えていたのですが、母校からお声が掛かり二〇年ぶりにくらいに上野に戻ってきました。

僕が藝大生だったころに比べると、情報や時代の流れが早いような気がします。ただ、便利が芸術をよくするかというところでもない。アナログの世界にも大事なものが残っていると思えること

筒井ともみ

大学院映像研究科映画専攻（脚本領域） 准教授

×

福島明也

音楽学部声楽科准教授

が結構ありますね。今のメトロノームはデジタルですから、音では聞こえるけれど途中の動きがわからなくなってしまう。視覚からも入ってこない、時間の経過や流れ、テンポやリズムといったものが、その人の体に作用しないということもあると思います。

自分にいちばん合っている調性に変えるとき、僕たちは手書きで必死になって写譜をしましたが、今ではコンピューターに入力すれば、全調が変換されて出てきます。苦労しなくても手に入るというのは便利ですが、果たして音楽をつくったり、創造するのにいいのかという疑問を感じる時はあります。

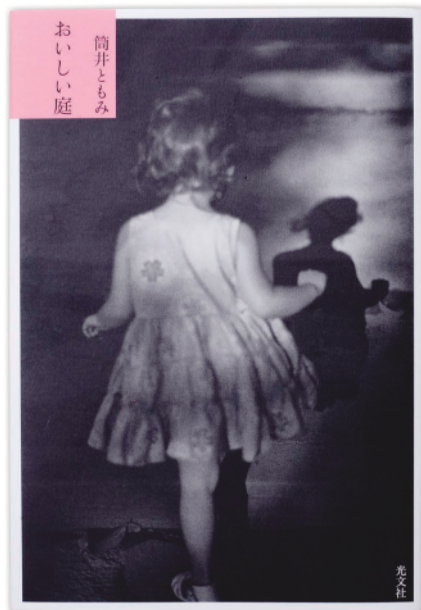
ただ、昔も今も変わらないのは、学生たちの持っている意欲や才能ですね。私たちの時代よりもさらにまた磨きがかかって能力的には数段上だと

思います。

筒井 藝大から、最初に教員のお話が来たときには、すごく迷いました。プロで現役の人は、時間的にかなり難しいですからね。堀越さんからの依頼もあり、私の前に教えていらした、田中陽造さんというすばらしい脚本家の後を受ける形で引き受けることにしたんです。

私のゼミには現在、七人のゼミ生がいるのですが、藝大の卒業生はいません。脚本を勉強したという人もいるし、全く関係ない広告代理店に勤めていたという人もいます。二十代が三人、三十代が二人、なぜか四十一歳の女性が二人います。

監督や脚本家なんて、大学院を出たから就職があるというわけではないですから、個性的でチャームिंगな脚本を書いてくれたら、力になってあげたいと思っています。



筒井ともみ『おいしい庭』（光文社刊）© 渡辺誠

福島 藝大に戻ってきてまだ数カ月ほどですが、まだ先生方のお名前と顔が一致しないという状態です。ましてや美術の先生となると、学外で一緒に仕事をしたことのある日比野克彦さんくらいしか交流はありませんね。

僕はバスケットボール部に入ったり、スキー部に所属したり、四芸祭や藝術祭にも積極的に参加する学生だったんです。藝祭では、建築科と音楽科と一緒に神輿をつくりました。藝祭は、音楽学部と美術学部の学生が交流するいいきっかけになるんです。秋になると音楽と美術の学生のカップルができていたりする。それ以外は学部が違っていると、通りを越えて大浦食堂までは行くけれど、その先はなかなかみたいになりますね。

筒井 私のゼミ生たちに、なぜこの大学へ来たのと聞くと「仲間がいるから」とこたえます。でも私は同業者との付き合いは、さして面白いと思わない。

仲間内で同じようなことをやっている人より、異業種の人と付き合っているほうが、考え方や発想といった点でとても刺激を受けますから。例えば美術やダンスをやっている人、理系や哲学系な人たちと交流するほうが絶対に面白い。

福島 僕は、地方で活動している建築家の同級生や、彫刻や彫金の知り合いもいて、バスケット部の連中とは今でも交流がありますが、藝大は一二〇年

という歴史を振り返ってみても、音楽と美術の交流がなかなか難しいのかもしれない。

千住にある音楽環境創造科で声楽の実技、演習があるのですが、絵画科やデザイン科の学生がちょっと歌をかじりたいとか、どんなものか知りたいたいということで受講しています。音楽学部では、別の楽器を副科で選択することができるのですが、美術学部の人たちが音楽を学びたいと思うときには、サークル活動以外の機会は限られているのかもしれませんね。

芸術のフィジカルな部分

筒井 子供のころ、家にあった蓄音機でよく聴いていたのが、バルトークやドボルジャーク、ストラビンスキー。ちよつと変わった好みの子供だったの。個人用幻灯機みたいな玩具もあって、水と風と光と岩石と、風光明媚なところじゃなくて、風景の元素だけでできているような荒くれたった景色を見るのが大好きでした。そういうものに入って、ザワザワするような音楽を聞くのがすごく好きだったの。

私はドラマでも映画でも、脚本を書くときには、音楽はどうしてもこの人がいいと提案するんです。例えば、「この作品はどうしてもクルト・ヴァイルの音楽でやりたい」と言ってる。大抵「分かります」



筒井ともみ（つづい・ともみ）

大学院映像研究科映画専攻（脚本領域）准教授

一九四八年、東京都生まれ。成城大学卒業後、脚本家に。主な脚本作品として、TVドラマ「響子」（第14回向田邦子賞）、映画では「それから」（キネマ旬報脚本賞、「失楽園」（日本アカデミー賞優秀脚本賞）、「阿修羅のごとく」（日本アカデミー賞最優秀脚本賞）、ほか、ジャンルを越えて多数。今年、短編小説集『続・食べる女』（アケセス・パブリッシング）、「うつくしい私のからだ」（集英社）、エッセイ集『着る女』（マガジンハウス）、「おいしい庭」（光文社）を刊行。二〇〇七年四月より現職。



くいいという理由で」反対されましたけど。だから藝大出身のちょうど私と同じか少し下くらいの人にも随分つき合っていました。

そう言えば藝大には衣装専攻がないですね。人の皮膚に最初につくものです。衣装が素晴らしいかったら役者さんはのれるんです。照明も美術もあるのに、衣装という極めてフィジカルなものを藝大はどうしてつくらないのでしょうか。それはずいぶん提案したいですね。

福島 オペラの身体表現というのは、基礎音楽のカリキュラムに含まれているのですが、専門的に学ぶのはなかなか難しいんです。学部だけで体得するのは無理ですし、大学院では身体表現の基礎的な部分を授業の中に取り入れているのですが、それだけでは、やっぱり弱いんです。

本当は、全くジャンルが異なると思ったほうがいいくらいなんです。音楽の分野にオペラがあるのではなくて、歌という共通する部分はたくさんあるけれども、オペラというのはさまざまな要素が合わさっている、本来はそれぞれ独立した専攻がないといけないんですよ。映像があって、照明があって、舞台の衣装があって、バレエもあって、演劇もある。そういった専門的な領域が組み合わさり、重なり合ったところにオペラというのは位置しているのだと思います。

今年の秋に藝大で、デザイン科の先生の協力を得てオペラ公演をします。舞台装置をデザイン科の方につくっていただいて、『ラ・ボエーム』をやるんです。そういった音楽学部と美術学部のコラボレートができ始めているというのはすごく喜ばしいことだと思います。そこから付随することも出てくるので、ようやく今垣根を越えたところではないでしょうか。

筒井 映画専攻の学生たちはラッキーなんです。入学後すぐに一〇分くらいの作品を書かせるんですが、その内の選ばれた二本は、黒澤清さん監督のもと16ミリで撮影してもらえます。今年は、二年の脚本の一部を北野武さんが監督してくれました。学生たちには、一生かかってもこれ以上のスタッフでやることはない、と言っているの。(笑)夏休みには、監督コースの五人が映画を撮る。この映画の脚本は、脚本コースの学生だけではな

くて、すべての領域の学生たちが書いていいんです。映画というのは、すべてのスタッフにプロデュース能力があつて、脚本もわかったほうがいいから。それもあつて全員が書いた三〇本くらいの脚本の中から五本を選んで、その脚本を夏休みのあいだにそれぞれ二週間かけて撮るんです。

そういったときも衣装はやはり工夫のしどころで、例えば舞台装置にしても一本の木だけで象徴することだってあるわけでしょう？ だから衣装のプロが後ろにいてくれて、学生たちに衣装もつけさせたらおもしろいと思うんだけど。

コンサバ化する若者たち

筒井 最近の若い人は、魂がコンサバティブ（保守的）ですね。私としては、不良になることや自由になることのお手伝いができたらいいなと思っています。モラルや考え方がなかなか古いんだもの。

入試の三次試験を、今年は私が担当したのですが、何かお題を出して短いプロットを書かせるんです。去年は「アジサイ」だったらいいのですが、私は「僕（私）のセックスについて語るべきこと」というお題を出してみたの。出てきたものを読んだら、ものすごく古いの。例えば、好きな子とセックスをする。すると女の子のほうが初めてじゃなかった。それで男は嫌気がさすという話があったんです。一緒に面接した黒澤さんは「今時そんな男がいるか、ぶっ飛ばされるぞ」と言っていました。平気でそういう話が出てくるんです。

自由じゃないとか、意外と冒険心がないとかいうか、全然セクシーじゃないの。人が思いつかない発想とか、新鮮な物の見方や世界への取り組み

み方とか、そういうものが面白いんじゃないですか。それなのに極めてコンサバティブな人が多いと本当に感じました。

技術なんてものは覚えていくし、それよりも私は強くてしなやかな魂のほうがずっと大事だと思います。それをどうやって、彼女たち、彼らが身につけていくかは一概には言えないけれど、でも私はそういうことのほうを大事にしたい。自分の魂と動脈でつながったものでなければ、絶対に人の気持ちを揺さぶれないと言うんですけれどね。歌だって何だってそつだと思う。

福島 まだ、自分をさらけ出せないのかもしれないね。確かに僕らの時代は、意外と自由な発想で何でもやってみて取り込んでいたような気がします。藝大という場所にせつかく入って来たんだから、伝統は知っておかなければいけないと思うけど、トラディショナルに縛られてはまずいんですよ。

筒井 特に脚本というのは、トラディショナルな書き方なんて何もないですからね。学生たちは、書くことも生きることでも、うんと「やんちゃ」であつてほしいな。

一人前になるというのは、いろいろな意味で自由に手足を伸ばせることだと思うの。どんどん周りが表面的な豊かさで覆われて、没個性の人が多くなっているじゃないですか。昔はみんなもつと

色濃かったのに。この国は他者と違うことを恐れるような教育をするけれど。でも絶対、その人らしさが大事。とりわけ表現者をめざすのなら。

人と違うことこそ価値ですものね。それをどうやって伝えてあげられるかな。人と同じでとりあえずまとめるんだったらプロのほうがうまいし、安くて早くてみたい人は大勢いるわけですから。一見不恰好に見えるものでも、だれも見えていない見つめ方をするものが入っていたら、やっぱり大事にしてあげたいと思うじゃないですか。

福島 もともとそういう個性を大事にする世界ですからね。

学校という場所は、成績を数字で表して人を振り分けるけど、芸術というのは数値に出ないものです。だから僕の高校時代なんて先生に嫌われましたものの、おまえのことはわからん、と言われて。僕だけ本当に排除されそうでした。

だから今、学生といえども、自分で切磋琢磨して、自分に磨きをかけてきたものがいたら、その辺はできるだけ摘み取らずに大事にしてあげたいですね。

筒井 シナリオでいうと、セリフが上手な人は最初から上手なんです。人間の感性みたいなものですからね。構成とかは経験を積むことで、うまくなるんですけど、セリフだけは天性の部分があるので、これはしょうがないですね。へたでも本当

にその人らしいものが出てくれば、それはまたいいんですけれど。

シナリオに関しては、私は技術なんてどうでもいいと言っているの。とにかく「やんちゃ」であることが重要なんです。

福島 人間的に感受性や感覚が鋭い人、おもしろいものをたくさん拾って歩けるほうがいいかもしれないですね。何か落ちているなと思ったら、逃げないで何だろうと確認にいける人が一番いいような気がします。

音楽学部について、今考えていることは、声楽科は声楽科、ピアノ科はピアノ科、作曲科は作曲科とそれぞれの部屋がみんな分かれているじゃないですか、それをみんなワン・フロアにしたらどうかと思っているんです。すべての科を全部一緒にして、シャッフルして、別の科の先生に、「いま何を書いていますか」と言える環境にしたほうがいいような気がしています。だってオーケストラがないとオペラはできないし、ピアノがないと声楽は何もならないし、そういうところで忌憚のない意見をいろいろと戦わせれば、また別の何かが出てくるような気がしますね。

もつともつと接点がたくさんあるはずなのだから、もつと積極的に交流ができるようにしていけたらいいと思います。

筒井 大賛成！



福島明也（ふくしま・あきや）

音楽学部声楽科准教授

一九五七年島根県生まれ。東京藝術大学音楽学部声楽科卒業。同大学院声楽専攻修了。文化庁オペラ研修所第五期修了。

須賀靖和、森山俊雄、ヴィルジニア・ボッローニ、ジュニー・アンヴェルトの各氏に師事。

オペラデビューは『ラ・ボエーム』のマルチェロ。バリトン歌手とともに、オペラ作品の音楽監督や、歌舞伎にも挑戦するなど幅広い活動を展開。二期会会員。

京都市立芸術大学音楽学部助教授などを経て、二〇〇七年四月より現職。

NEWS

2007.3~2007.8

藝大ブランド油絵具 「油一/YUICHI」発売



油絵具「油一/YUICHI」のロゴマーク。

前身の東京美術学校で西洋画科教教授だった黒田清輝は、かつて「応用化学」を担当する教員を招くなどして独自の油絵具作りを目指したが果たせなかった。およそ百年を経て誕生した「油一/YUICHI」は、黒田以来の夢の実現でもあり、今年迎える本学の創立一二〇周年に新たな彩りを添えるものとなった。

美術学部油画技法材料研究室とホルベイン工業株式会社との五年間にわたる共同研究（「理想的な油絵具の研究」）の成果として、独自の油絵具「油一/YUICHI」を開発・発表した。学内のギャラリーショップ「藝大アートプラザ」で五月八日から販売している（三十色セット十三万一千二百五十円、各色単品三千九百九十円）。産学連携による研究成果を世に問う試みとしては、本学初。



チューブやパッケージのデザインも共同研究によるもの。

交流

◆大学間国際交流協定締結

四月五日、パリ国立高等美術学校（フランス）と本学は、芸術に関する交流及び教育研究協力を行うことに合意し、芸術国際交流協定を締結した。この調印により、本学における交流協定締結校は十三カ国（地域）、三十三大学等となった。

◆フィンランド芸術系大学視察団訪問

五月十一日、ヘルシンキ芸術デザイン大学、シベリウス・アカデミー、フィンランド美術アカデミー、舞台芸術大学の視察団及びフィンランドセンター学術担当マネージャーが、日本・フィンランド計画二〇〇七二〇一の活動として本学を訪れ、学内視察の後、守山国際交流室長、三田村美術学部国際交流部会長らと懇談した。

◆四芸術大学体育・文化交歓会

スポーツ競技や展示会・演奏会を通して学生交流を深めることを目的とした「四芸術大学体育・文化交歓会」（四芸祭／東京藝術大学、愛知県立芸術大学、金沢美術工芸大学、京都市立芸術大学）が、五月二十四日から二十七日まで京都市立芸術大学において実施された。

本学は、体育競技部門において総合優勝し、学長室にて実行委員より優勝報告が行われた。

受章・受賞

◆宮田学長が内閣総理大臣賞受賞

平成十九年三月、宮田亮平学長が第四十六回「日本現代工芸美術展」に出展した作品で内閣総理大臣賞を受賞した。

◆取手アートプロジェクト（TAP）が第二十九回「サントリー地域文化賞」を受賞

本学、取手市、市民が三位一体となり、平成十一年より毎年行なっている文化事業「取手アートプロジェクト」が、市民などを巻き込んだアートによる新たな街づくりを評価され、第二十九回「サントリー地域文化賞」を受賞した。



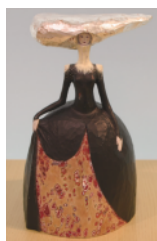
◆映像研究科優秀修了制作作品に横浜市長賞授与

七月三十日、大学院映像研究科映画専攻第一期生、池田千尋監督の「鬼のダンス」が優秀修了作品に選ばれ、横浜市庁舎において中田横浜市長より市長賞が授与された。

運営

◆第一回 藝大アートプラザ大賞入賞作品展

学生の制作活動の成果を広く社会に発信するため、学内アートコンペ「藝大アートプラザ大賞」（第一回の作品テーマは「宇宙」）を実施した。総勢四十一名（八十三点）の応募の中から、厳正な審査を経て選ばれた二十四名（五十四点）の入選作品を、四月二十二日まで、藝大アートプラザにて展示販売した。



初代の藝大アートプラザ大賞を受賞したのは、美術学部彫刻科に在籍する中村弘峰さんの作品「幕開け」。

◆平成十八年度卒業式

「学長！ 岡倉天心になる」三月二十六日、奏楽堂にて平成十八年度卒業式が挙行された。今年の卒業式は、村井祐児教授、小畑義昭助教や音楽科学生らによる奏楽で華やかに幕を開け、学長式辞では、壇上に並んだ関根知孝教授や邦楽科学生らの謡と囃子が高らかに鳴るなか、東京美術学校創立当時の制服を纏った宮田亮平学長が、古代中国の全文に表れた「命」という文字を縦横約二メートルの特製パネルに揮毫して会場を大いに沸かせ、社会へ旅立つ学生を激励した。



◆社会連携センターの設置

本学では、社会に開かれた大学としての機能を強化するため、四月一日に、学長の直属組織として「社会連携センター」を設置した。これまで学内の大学美術館、奏楽堂で開催される展覧会、演奏会に、平成十七年度には三十一万人、平成十八年度には四十一万人を超える方々をお迎えした。また、学外のさまざまな地域では、今年九月目を迎える取手アートプロジェクト（TAP）を始めとするアートプロジェクト、展示、インスタレーション、ワークショップ、シンポジウム、市民講座などの活動、年間百四十件を超える依頼演奏を行うなど、さまざまな活動を展開している。今後、社会連携センターでは、このような本学の多様な活動情報を積極的に発信していくとともに、「産学公（官）連携活動」「地域連携活動」「文化貢献事業活動」の総合窓口となるほか、様々な共同プロジェクトを提案して行く予定である。

東京藝術大学創立一二〇周年記念事業募金にご寄附いただきました皆様

七月三十一日現在（敬称略・五十音順）

〔個人〕

赤羽根一司 浅津勲 安達謙三 新井繁男 荒居廣 荒川明照
有賀誠門 池毅 池田政治 石井中子 石川浩一 石澤孝子 石橋泰
和泉きよ子 和泉良彦 磯貝紀枝 板屋一弘 伊藤美智子 稲次敏郎
井上弥久 岩坂寛 歌田真介 梅村寛 浦井正明 太田和良幸 大塚恵子
大西長利 岡田信造 奥村伸二 越智雄一 垣内光子 川下繁一
菊池君子 鬼島康宏 北澤京子（大浦食堂） 工藤儀助 隈部孟
栗原茂 児島正剛 小林秀夫 近藤達一 斉田賢二 斎藤一郎 坂本一 道
佐藤和夫 佐藤眞 佐野靖史・かはる 澤田まゆみ 三林輝夫
篠田清 島崎敏一 下崎航 下里まき子 ジャニイ岩橋 鈴木規夫
澄川喜一 関根将雄 瀧山眞寿子 高木淳子 高木学 高梨秀美
高橋彬 高橋茂生 高橋豊 瀧澤亨 瀧沢布沙 谷村秀 田淵俊夫
玉井賢二 田村宏 堤浪夫 橋和実 塚登久夫 寺嶋孝・孝佳
戸田敏子 外山雄三 永井隆夫 中西和治 中根寛 中林忠良 中村進治
七瀬嘉泰 新島治男 西村清 長谷川十郎 長谷川寛 林トノ節子
原正樹 平松保城 平山郁夫 福島規代子 画翠藝大店 福田徳樹
藤野宗次郎 堀江振一郎 松永勲 松林慎一 摩尼義晴 三浦朱門
宮下安弘 宮田亮平 三好二郎 武藤三千夫 村上徳子 村山鎮雄
毛利順子 望月積 屋皇宣仁 矢沢真司 谷田貝津喜子 山岡耕作
山本正男 古澤壮一 吉田由宇子 吉田和夫 和久奈子よ 渡邊健一
渡邊幸夫

●作品を提供し、東京美術倶楽部より寄附いただきました
梅原幸雄 網谷幸二 田淵俊夫 手塚雄二 中島千波 宮廻正明
数内佐斗司

〔企業・団体等〕
アサヒビール（株）（株）石川画廊（株）伊豆栄（株）和泉画廊
（有）いづみ画廊 岩勝画廊（株）印象社（株）永善堂（株）NH
Kプロモーション（株）大阪美術倶楽部 大阪美術商協同組合
（株）大消銀器（有）岡村多聞堂 おぐら美術（株）金沢美術倶楽部
金沢美術商協同組合 株木建設（株）（株）画廊きよみず（宗神

田神社（有）キッズツリー（株）紀伊國屋書店（有）キャッスル
（株）ギャラリーあおい（株）ギャラリーぐんじ（有）ギャラリー
長谷川（株）ギャラリー広田美術（株）京都美術倶楽部 京都美術
商協同組合 清澄画廊（株）藝大BiOn（株）コイルセーターフ
ジタ（株）後藤紙店（株）小林画廊（株）彩光画廊（株）彩鳳堂
画廊（株）サン・アート 月刊美術（株）三澤洞 三和酒類（株）
（株）資生堂（有）秀山堂・秀山堂画廊（株）城北ニユーメディア
（株）神通静玩堂 新日鉱ホールディングス（株）（株）靖雅堂 夏
目美術店（株）精養軒（株）太陽画廊（株）高島屋（株）田島美
術店 東京瓦斯（株）東京ガス豊洲開発（株）（株）東京スタデオ
（株）東京美術倶楽部 東京本郷イータークラブ 凸版印刷（株）
（株）富山美術倶楽部 富山美術商協同組合（株）ナカジマアート
（株）中村好古堂（株）名古屋美術倶楽部 名古屋美術商協同組合
21世紀東京書道交流協会（財）日本交通文化協会 日本サムスン
（株）日本通運（株）関東美術品支店（社）日本銅センター 日本
メナード化粧品（株）（有）袴田美術店（株）日本郵船（株）野村ホ
ールディングス（株）（有）花田美術 東日本遊
技機商業協同組合 美術学部厚国会 美術学部杜の会（株）フク
シ・エンタープライズ（株）福屋（株）フジキ画廊 芳山堂（株）
ホテルオークラ ホルベイン画材（株）ホルベイン工業（株）（有）
増保美術（株）松坂屋（株）丸栄（有）丸栄堂 みずたに美術（株）
（株）三長（株）三越（株）水戸忠交易（有）みはし（株）宮本卯
之助商店（株）村越画廊 村松楽器販売（株）（株）村松フルート
製作所 明治安田生命保険相互会社（財）林美術財団 名都美術館
安田不動産（株）（有）柳井美術（株）山野楽器 ヤマハ（株）
（株）ヤマミュージック東京（株）彌生画廊（有）ユーシーベン
ディング商会（株）横井春風洞 ヨシオカ画廊（有）吉野画廊
（有）六文舎（有）若山長汀洞

八月以降に寄附いただいた方の芳名は次号に掲載さ
せていただきます

第15号刊行にあたって

創立120周年を記念して宮田学
長と成田電通最高顧問との対談を企
画、実施した。藝大の社会連携のあ
り方を考える時、産む側と伝える側
という、対極にある両者の意見にど
のような違いがあるのか、両者の温
度差を実感したい、そんな思いが編
集部にあったことが実現した理由だ。
それぞれのお立場から日本の文化の
魅力、藝大の役割を熱く語っていた
だいた有意義な対談であった。

また、対談の中でお二人の共通の
知人である元ソニー会長大賀さんの
「今こそ藝大に経済学部をつくるべ
き」と言った趣旨のご発言が披露さ
れた。工学のみでは限界を感じてい
る今の産業界全体から、芸術に対し
ラブコールを受けたよう。大賀さん
のような芸術の伝道師、偉大な先輩
がいたことにあらためて感謝したい。

藝大通信編集長
長濱雅彦

◆平成十九年度入学式

四月十日、奏楽堂にて平成十九年度
入学式が挙行された。浦川宜也教授に
よる奏楽で新入生を歓迎し、学長式辞
では、壇上で揮毫した「心」という文
字を掲げて学生たちを激励した。

◆附属音楽高等学校

オーケストラパブリック演
（ユネスコ平和祈念コンサート）
四月二十三日、本学音楽学部附属音
楽高等学校のオーケストラが、パリの
ユネスコ本部で演奏会を行った。この
演奏会は、世界の紛争や貧困に苦しむ
子どもたちのための平和祈念と、コン
サートを通じての募金活動による教育
環境向上を願って行われ、世界各国か
らの一〇〇〇名を超える聴衆からの鳴
りやまめ拍手で幕を閉じた。

◆映画専攻第一期生の
修了制作作品上映

五月十二日から十三日まで、横浜校
地馬車道校舎において大学院映像研究
科映画専攻第一期生修了制作作品が上
映された。個性的な六作品が上映され、
会場は立ち見が出るほどの盛況だった。

◆「藝大素述―美術学部の
教育現場から」を出版

東京藝術大学美術学部・東京藝術大

学出版会発行による記念すべき一冊目
「藝大素述―美術学部の教育現場から
」が完成し、七月十四日より発売さ
れた。



本冊子は創立一二〇周年をひとつの
契機として、美術学部の教育の現在を
あぶり出すことを狙いとしている。二
〇〇六年度に実施した全教員へのイン
タビュー記録と、教育・制作・発表・
講評などの現場を取材した画像を収録
している。詳しくは、藝大アートブラ
ザ（〇五〇―五五二五―二二〇二）

◆藝大フレンズ加入者状況

加入者数（平成十九年七月三十一日現
在）
賛助フレンズ個人二三名 法人五団
体
特別賛助フレンズ個人一八名 法人一
団体

展覧会・演奏会の最新情報は、東京藝術大学公式Web
サイト（<http://www.geidai.ac.jp>）をご覧ください。

展覧会についてのお問い合わせ
東京藝術大学美術館 Tel. 050-5525-2200
NTTハローダイヤル Tel. 050-5777-8600

演奏会についてのお問い合わせ
東京藝術大学音楽学部演奏企画室
Tel. 050-5525-2300

演奏会チケットの取り扱い
藝大アートプラザ Tel. 050-5525-2102
ヴォートル・チケットセンター
Tel. 03-5355-1280
チケットぴあ Tel. 0570-02-0990
東京文化会館チケットサービス
Tel. 03-5815-5452

藝大アートプラザのご案内
（株）藝大BiOn（ビオン）
Tel. 050-5525-2102
Fax 050-5525-2486

